

論文の内容の要旨

論文題目: メディアの発見 マーシャル・マクルーハンの方法

氏名: 門林 岳史

1960年代に活躍したメディア論者マーシャル・マクルーハン(1911・1980)は、メディアが社会にもたらす影響を力説し、メディア論に先駆的な貢献を果たした人物として知られている。その一方で、その後の学術的なメディア研究の文脈では、彼はユートピア的で反動的な技術決定論者として繰り返し批判にさらされてきた。すなわち、メディアによる人間の感覚の変容を説くマクルーハンの議論は、社会の変化が技術によって一元的に規定されていると捉える技術決定論であり、メディアが技術的な要因のみならず、政治や経済、文化など様々な要因に複合的に規定されながら社会のなかで構築され、様々な可能性に向かって開かれている側面を見落としている、と批判されてきたのである。しかしながら、構築主義の観点からなされるそうした批判にもかかわらず、透明な伝達チャンネルとしての技術に一元的に還元されない不透明な媒介物としてのメディアに向けての想像力が、60年代にマクルーハンが浴びた脚光とともに切り開かれたことも事実である。「メディアはメッセージである」というマクルーハンの有名なアフォリズムが雄弁に訴えていることは、メディアにおいて問題なのは、メディアによって伝達される内容ではなく、内容を枠づけるメディアの形式そのものである、ということであった。ここに見られるのは考察の水準をメタレベルへと引き上げる態度変更であり、マクルーハンという名とともに歴史に記録されるこうした認識論的

な転位によって、「メディア」という存在をそれ自体対象とする研究領域がそもそもその可能性において切り開かれたと捉えることもできるのである。

マクルーハンはどのようにして「メディア」という対象を発見したのだろうか。メディア論を条件づけるこの問いに、本研究はマクルーハンに固有の「方法」に着目することで答えようとする。このような問題構成には、マクルーハンのテキストを整然とした理論へと還元することによっては答えられない。それはマクルーハン独特の言語使用と不可分であり、また、それが受容されたコンテキストと切り離せないのである。そうした問題の所在を明らかにするべく、序論「マクルーハンの言語ゲーム・ホワッチャドゥーイン・マーシャル・マクルーハン？」は、60年代のマクルーハンをめぐる状況を辿るとともに、そうした状況のなかでマクルーハンのテキストが持ったパフォーマンス的な性格を際立たせる。続く本論は、マクルーハンのテキストの厳密な読解によって彼の方法を理論的に抽出するとともに(第一部)、それをその背後にある知的伝統のうちに位置づけ(第二部)、さらに戦後アメリカの社会的、文化的状況のうちに差し戻す(第三部)ことで、上述の問題を究明するものである。

第一部「感性論者マクルーハン・理論的読解」は、マクルーハンの二つの主著『ゲーテンベルクの銀河系』(1962)と『メディアの理解』(1964)の体系的な読解により、脱構築的にマクルーハンのメディア論の方法を浮かび上がらせることを試みる。まず第一章「芸術家になること・マクルーハンの理論と方法」は、『メディアの理解』を厳密に読解し、理論的に再構築するとともに、そうした理論の可能性の条件そのものを突き止めようとする。とりわけ着目するのは、マクルーハンが好んで用いたプローブと呼ばれる短文形式がテキスト戦略として持っている効果である。そうしたマクルーハンの叙述方法は、マクルーハンのテキストを理論として理解することを可能にするとともに、マクルーハンのテキストが書かれる方法そのものも構成している。本章の主題は、そうした理論と方法の不可分な共犯関係であり、そのような理論＝方法をその構成的な起源において可能にする形象としての「芸術家」にマクルーハンのテキストの真に批評的＝危機的^{クリティカル}な契機が求められることになる。

続く第二章「触覚、この余計なもの・共感覚と麻酔」は、マクルーハンにおける「触覚」という形象に注目する。メディアを人間の感覚の拡張と定義するマクルーハンのメディア史観は、アルファベット、活版印刷技術の二つの技術に牽引されて支配的な感覚器官が聴覚から視覚へと推移していく過程として理解することができる。しかし、例えば口承文化がしばしば「聴覚＝触覚的」と形容されるように、この視覚／聴覚の修辞的な二項対立は、触覚という余計な感覚によって不安定にさせられている。本章はマクルーハンにおける触覚のメタファーを二つの歴史的な系譜に辿り、それらから抽出される「共感覚、諸感覚の統合作用」と「視覚的な体制から阻まれたもの、視覚的

無意識」という触覚の二つの規定性のあいだでそれを読み解くことにより、マクルーハンにおける^{エステティクス}美学＝感性論が「共感覚(synaesthesia)」と「麻酔(anesthesia)」という高次の二項対立の緊張関係のもとにあることを明らかにする。

次に第二部「美学者マクルーハン・系譜的読解」は、ニュー・クリティシズムの創始者I・A・リチャードに師事し、40年代から50年代にかけてT・S・エリオットやジェイムズ・ジョイスといったモダニズムの作家についての論文を数多く発表していたマクルーハンの初期の文学批評家としての活動を取り上げる。そうすることで、文学批評の方法がメディアの理論へと転位するさまを跡づけることが目的である。まず、第三章「意識の流れ」の制止・^{エステティクス}感性論的モダニズム」は、マクルーハンが傾倒していたモダニズムの文学の背後にある^{エステティクス}美学＝感性論的認識を明らかにし、その文脈のなかでマクルーハンの初期テキストを読解する。とりわけ着目するのは、モダニズムの文学において言語表現の問題として浮上する「感性の分離」や「意識の流れ」といったモチーフをマクルーハンが人間の認識過程とのアナロジーによって捉えていた側面である。そうしたマクルーハンの感性論的な文学論が、メディアを感覚器官の拡張として捉える感性論的なメディア論とどのように関わっているのかが論じられる。

第四章「生体解剖的美と探偵的知・ジョイスを読むマクルーハン」も引き続き、初期マクルーハンの文学批評における感性論的なモチーフを取り上げる。ここでとりわけ対象とするのは、マクルーハンのジョイス論「ジョイス、アキナス、詩的過程」(1951)と、それが読解の対象としているジョイスの小説『スティーヴン・ヒーロー』である。この小説は、主人公スティーヴン・ディーダラスが起草している美の理論をめぐって展開される。芸術家による美の把握＝創造の過程についてのこの理論を読解するマクルーハンの手つきを検討するなかで、とりわけ着目するのはマクルーハンが際立たせる「生体解剖」と「探偵」という形象である。こうした形象のもとに理解される、認識の過程と創作の過程が制止した瞬間のうちに折り込まれた極めて知的で分析的な過程としての美の把握のあり方が、のちになってマクルーハン自身がメディアに向きあう態度の範例を与えていることが示される。

マクルーハンの理論的読解からその方法を取り出す第一部、文学批評の方法がメディアの理論へ転位していく過程を描く第二部の作業を受けて、最後に第三部「芸術家マクルーハン・時代的読解」は、再びマクルーハンのテキストを同時代のコンテキストに差し戻す。ここでの試みは、マクルーハンの理論と方法が切り結ぶさま、そのねじれを、テキストの歴史性のうちに読み解くことである。まず、第五章「メディアの幼年期——テレビと戦後アメリカ」は、戦後アメリカの社会的変容という文脈のなかで、急速に普及したテレビというメディアについてのマクルーハンの議論を読解する。同時代におけるメディア環境の変容に機械時代の終焉と新たな電気時代の到来を見たマ

クルーハンは、テレビを電気時代の到来を告げる最も重要なメディアと見なしていた。本章は、マクルーハンが触覚的でモザイク的であると考えたテレビという形象が、メディアがその初期の段階で持つ可塑的な性質の象徴に他ならないことを明らかにするとともに、それを同時代のポピュラー・カルチャーの台頭のなかで生じつつあった価値の転倒のうちに関連づける。

第六章「クールの変容・プローブすること」も引き続き、戦後アメリカ文化における価値の変容という文脈のなかでマクルーハンのテキストを読解する。ここで取り上げるのは、「クールなメディア」と「ホットなメディア」というよく知られた対概念であり、それを1950年代に「クール」という語が日常的な表現において被った意味内容の転倒との関わりにおいて考察する。そのなかで明らかにされるのは、「クール」という言葉が同時代に持った重層的な意味規定のなかにマクルーハンのテキスト戦略が織り込まれていることである。そうした観点から、「クール」という言葉が、単に「ホット」との対でメディアを弁別するカテゴリーであるだけでなく、マクルーハンの方法をパフォーマンスに発動させる契機を持っていることが示される。

最後に結論「四角形の冒険——図式のパフォーマンス」は、以上で三つのアプローチから考察してきたマクルーハンの方法を振り返り、死後に出版された『メディアの法則』(1988)における、以前の仕事を理論的に再構築しようとするマクルーハンの試みとの関連から再考する。とりわけ、この著作でマクルーハンが定式化する「テトラッド(四つ組)」と呼ばれるダイアグラムに着目し、それを構造主義者たちが用いたクライン群という同じく四角形で図式化される数学的構造と比較することで、マクルーハンの図式がそれ自体方法として持つパフォーマンスな効果を明らかにする。